

## 奇跡の島の、"栃木県 "

奇跡の島 日本

みなさんは、世界中にある植物の種類が6割が日本にあることをご存知でしょうか。私は、知りませんでした。ただ、以前から、日本の夏の山林の様子は熱帯雨林のジャングルに勝るとも劣らないと思っていました。

実は日本は、世界の中でもまれにみる水と緑に恵まれたところなのです。春から秋にかけては梅雨や台風・秋雨などが多量の降雨をもたらしてくれるのです。そして世界の中で稀有なことは、乾期である冬に降水量（降雪量）が多いということなのです。日本の四季の美しさの理由はここにあるのです。この緯度でありながら年間を通じた降雨と、冬季の日本海側と山間部における豪雪ともいえる降雪がある地域は他にはないのでしょうか。地球は奇跡の星といわれますが、私は、奇跡の島 日本 ではないかと思っています。これは決して大げさに言っているわけではありません。

日本列島の秘密 \* \* \* \* \* なぜ、乾期に豪雪 \* \* \* \* \*

ではなぜ、春から秋にかけて多量の降雨をもたらす、特に冬季には多量の降雪をもたらしてくれるのでしょうか。

日本列島はユーラシア大陸の東に位置し、適度な緯度で温帯モンスーン地帯となっています。ここで特筆すべき点は、大陸と日本列島の間に適度な間隔を隔てた日本海があることと、その日本海に対馬海流という暖流が北上していることなのです。この日本海に、偏西風によってシベリアから寒気が流れ込み、猛烈に湿気を吸い込んで日本列島にぶつかって上昇気流となつて積乱雲をつくり豪雪をもたらすのです。大陸の東に位置し、適度な緯度、日本海、暖流、日本列島の山々が、豪雪をもたらすのです。しかも、この雪は春まで、山々に天然のダムとなつてストックされ、植物の芽吹きとともに、平地の私達人間と動植物に 水 を供給してくれるのです。

何度も述べますが、大陸の東に位置し、適度な緯度、日本海、対馬海流、日本列島の山々の存在が、乾期でありながら豪雪といえる降雨（降雪）をもたらすのです。大陸の東に位置する中国や朝鮮半島では、わずかな降雪があるだけなのです。乾期の豪雪は、まさに奇跡としか言いようがないのです。奇跡の島 日本 は大げさではないのです。

豊かな海の秘密 \* \* \* \* \* おいしい魚が食べられるのはなぜ \* \* \* \* \*

軌跡の理由がまだあります。日本人は毎日、いろいろな魚をおいしくたくさん当たり前のよう食べていますが、そんな国は他にはありません。世界中に海はありますが、魚介類が多様で豊かな海はそうはないのです。日本列島の周囲は世界の中でもまれにみる豊かな海なのです。

その秘密の第一は 水 なのです。日本中の緑豊かな森にストックされた 水 は、

日本列島の周囲の海に流れ込み、魚介類や海草に多くのミネラルを供給し、豊かな海になっているのです。

もちろん 水 だけではありません。日本列島のまわりではたくさんのプレート（大きな岩盤）がぶつかり合い、海溝や大陸棚そして日本列島をつくっています。この遠浅の大陸棚と、豊富なミネラルを含んだ豊かな水、そして日本列島をとりまく暖流と寒流が、多様な海草と多様な魚介類を育てているのです。日本列島の周囲は世界でもまれにみる漁場である理由はここにあるのです。

“晴天がつづく”、とちぎの気候

奇跡の島 日本 の中の栃木県はどうでしょうか。海なし県で、北西部の山間部を除いてほとんど積雪はありません。ということは、奇跡の島の中で恵まれない不幸な県ではないかと早とちりしそうですが、そうではありません。

栃木県における冬季の天気予報は、『山間部は一時雪ですが、平野部では晴天がつづくでしょう。』というフレーズがほとんどです。つまりこれは、人の少ない山間部の方に多くの雪が積もり、人が多い平野部では日照が多いということなのです。しかも標高の高い山々に積もった雪は、春まで天然のダムとなってストックされ、雪解けとともに平野と平地の人々にもたらされるのです。同じ平野部でも日本海側では、連日曇りか雪が降りつづき、冬場の日照時間はきわめて少ないのです。日本海側では、毎朝雪かきして、洗濯物は外に干せず、ふとんも干せないのです。寒い冬、過ごしやすいのはどちらなのかはいうまでもありません。

とちぎの水事情

栃木では冬場に、恵まれた日照がもたらされているのです。日本列島の太平洋側に当たる地域はどこも共通して日照に恵まれるため特筆すべきことではありませんが、しかし、なのです。とちぎ県に住んでいる人にとって、誰もが毎日見ている那須日光連山は、裏山のようなものです。その標高の高い裏山にのみ、毎年、大量の降雪と積雪があることを知る必要があるのです。那須日光連山は、私達に、貴重な生活水を豊富に供給してくれているのです。

となりの茨城県の裏山は八溝山系になりますが、その裏山には雪が積もることはありません。どちらが 水 に恵まれているかはいうまでもありません。

とちぎの地形

さらに、とちぎの“すごさ”が、まだあるのです。この水と日照だけではないのです。

栃木県の北西部は、標高が 1000m を越えた人々をたやすく寄せつけない奥深い山々を有しています。県東部は、東日本の四万十川と呼ばれる那珂川が流れ、なだらかで人々が親しみやすい里山が連なり八溝山系を形成しています。そして、県央南部は関東平野

の北部に位置し、日本の中でも有数の平野が広がっている地域なのです。

栃木県に住んで県央南部の広大な平野を日常的に目にしていると、平地は日本中いたるところにあるのではないかと勘違いしてしまいますが、日本国内において平地は極めて少ないのです。栃木県の県央南部には、たまたま、日本でも有数の広大な平野が広がっている、というところなのです。平地平野は農耕に適し、住みやすい土地であることは言うまでもありませんが、この平地が広大であることは、日本の中で稀有なことなのです。

#### “馬の背”の日本列島

世界地図の中で日本を見てください。細長い日本は、地球の表面の岩盤プレートがぶつかり合って造山運動によって岩盤が隆起してできた地形で、その島が南北に連なり、日本列島を形成しているのです。つまり、日本列島のほとんどは、海から馬の背が突き出したような急峻な地形で、そこから流れ出る大河川の下流域にわずかに平地が発達しているに過ぎないのです。

つまり、この栃木県は、日本で有数の広大なと、豊かな 水 を供給してくれる山々を隣り合わせている、稀な地域なのです。

豊かな水と広大な平野を有した地域であることを、言葉で言ってもなかなか実感できませんが、これを実感する方法があります。日本列島の周囲には小さな島がたくさんあります。周囲数キロ程度の小さな島を訪れて1,2泊してみてください。小さな島には平地がほとんどないことと、高くて奥深い山がないので水事情が悪いことを実感できると思います。私は、九州と四国の間にある周囲数キロ程度の沖ノ島を訪れたことがあります。平地はまったくなく、もちろん田んぼはないし、猫の額ほどの畑さえもみかけませんでした。急斜面に家がへばりつき、どの家も何十段もある石段をのぼっていくような立地なのです。日本中でバリアフリー化が進んでいますが、この島でバリアフリーというキーワードはありえないことを感じました。また、この島の民宿のお風呂は、シャワーのみであったことも印象的でした。

#### 日本の 水 事情

そういえば以前訪れた竹富島の民宿でも、浴槽に水はなくシャワーのみでした。つまり、『島』では、山や森が奥深くなく、水を豊富に蓄える能力が基本的に乏しいのです。四国の高知県にある『早明浦(さめうら)ダム』の湧水の話をよく耳にします。本州に較べ山や森が深くなく、冬場の積雪もほとんどない四国という“島”では、水事情がよくないことを物語っているのです。

実は、日本列島は細長い島なので、日本の山の奥深さは、世界の山々と比べるとたいしたことはありません。つまり、日本列島の山々は、豊富な水量を蓄える能力は本来それほど高いわけではないのです。

しかし、水と緑に恵まれているのは、年間を通じた降雨があるからなのです。特に冬場の豪雪が、毎年当たり前のように奇跡的に繰り返されていることを強調しなければなりません。さらに、その雪は、標高の高い山々に天然のダムとなってストックされ、春まで蓄えられていることいえることも忘れてはなりません。

“湯水のごとく”は、日本だけ

飲める水で毎日湯船につかり、飲める水でトイレも流し、洗車もしかりです。しかも1億人にもおよぶ人口のほとんどが、当たり前のようにじゃぶじゃぶ 水 を使っているのです。そんな国は世界に二つとありません。日本だけなのです。

とちぎ県では、さらにおいしい水を飲み、じゃぶじゃぶ使えるのです。奥深い山と森が、豊富な水を川や地下水となって、大量に水を供給してくれるのです。

とちぎの観光地

栃木県には、すでに観光地として知名度のある那須・塩原・鬼怒川・日光などの地域があります。また、最近確実に観光客が多くなっている那珂川・八溝周辺地域などがあるように、観光資源に恵まれています。このように栃木県は、広大な観光資源を有し、首都圏に隣接しながら人口密度は低く、まさに雄大な自然に恵まれた土地柄なのです。日本の総人口の4分の1、3千万人以上の人口を抱える首都圏の中心部から1,2時間程度で訪れることができるという立地は、やり方しだい勝ち組、いやひとり勝ちとなりうる可能性を持った地域であるともいえるのです。こういう話をすると、すこし鼻息が荒くなりそうですが、息を整えましょう。

魅力がありますか、“温泉街”

すこしこれまでのことを振り返ってみましょう。

国内でも有数の観光地であった日光・那須・塩原・鬼怒川は、これまで観光地として、健全に成長し、成熟した観光地となったのでしょうか。特に温泉街や、観光客が大勢集まる観光スポットや、そういった場所まで行く幹線道路周辺など、街並みや景観はどうでしょうか。塩原や鬼怒川など温泉地の町並みや風景はどうでしょうか。切立った急峻な山と渓谷に挟まれたわずかなスペースに建つ巨大な鉄筋コンクリートのホテル群は、豊かで雄大な自然に溶け込み洗練された風景を提供しているのでしょうか。

栃木県内の観光地や温泉街の風景から見えてくるのは、自分さえよければ儲かれば、という自己中心的な考えではないのでしょうか。各温泉街全体が、もう一度行ってみたいくなるような魅力的な観光地になったかと言えば、それを肯定することはできないでしょう。

恵まれた自然や歴史や温泉を背景に、経済活性化という名の利益優先のため、無秩序な開発が進んでしまったことは明らかなのです。有名な観光地でありながら、魅力のな

い街並みと風景となってしまったのです。真摯に反省すべきことであることはいうまでもありません。

今後どうしましょう、『観光地』

だからといって、別なところに新たな観光地をつくろう、ということではありません。50年、100年後、そして未来の栃木人のために、街づくりの考え方を根本的にかえなければならぬのです。数年間程度の予算をあてて行うような事業は街づくりとはいわぬのです。数十年後、数百年後、千年後を考えた街づくりを考えなければならぬのです。数十年、数百年以上にわたって一貫した考えが必要なのです。組長が代わった、社会情勢が変わった、時代が変わったからといってそのつど方針を変えたり、わずかな予算で事業をやってみる程度では、健全に街づくりは進まないのです。

また、これまでの地域社会のおかしいところは、長期的で一貫した“方針やコンセプト”がないまま、経済の活性化という名目で、街灯を設けたり舗装をしなおす程度で、長期的な目標を定めた計画を持たず、公共の利益や将来のことは考えられてこなかったのです。

さて、ここで少し、私達の身の回りのことや風景などについて考えてみましょう。

### 大量消費と大量廃棄社会

ある写真家が、世界各地のごく普通の一般家庭の家財道具の写真を撮り歩き、日本の家庭の家財道具の多さに驚かされたそうです。しかも、その種類はプラスチックにビニールや合板など工場で大量生産される工業化学製品がほとんどで、日本人の家にはその土地の風土を感じさせるものはほとんどなくなってしまっているというのです。まさに、現代社会は大量消費と大量廃棄社会で、100円ショップやリサイクルショップの多さがそのことを象徴していると思います。

『え、リサイクルショップは環境にやさしいのでは、』と聞こえてきます。確かに環境に貢献してはいるのですが、本質はそうではないのです。まだまだ使えるものが次々と処分され、新たなものに次々と更新されているのです。使用性能や機能になんら問題のないものが、次々と処分され更新されているから、廃棄するにはもったいないものがあふれているのです。その結果、リサイクルショップがあちこちにできているのです。現在のリサイクルショップは、大量消費と大量廃棄社会を象徴しているのです。

### 町並みや風景

私は、以前、橋の設計や計画に携わっていました。橋は風景をつくるといわれ、私自身それなりに考えデザインしてきたつもりですが、風景の主役は橋ではありません。風景の主役になっているものは家や建物であり、その街並みであるといえます。この家並

みや街並みを見てどう思いますか。それらの建物ひとつひとつは思い思いにデザインされ、かっこいい家や素敵なお店などたくさんあります。しかし、こういった家や建物を町並みや風景として見るとどうでしょうか。みんな自分勝手に統一性がなく、特に最近の大型店舗などでは目立つことが必要であるため、派手な色で看板は巨大であるなど、風景として洗練されていないどころか、少し下品ではないかと思えるくらいのところもあると感じているのは私だけではないでしょう。

#### 燃えない腐らない建材

そして、素朴な疑問があります。今の住宅に使われている外壁材などのことです。外壁材は主にサイディングと呼ばれ工業製品化されています。こういった建築材料の耐火性能や耐候性・耐久性には驚かされます。何十年も日光や風雨にさらされても変化しないし、長時間火であぶっても燃えないし変形しないし熱を伝えないというのです。そして、大量かつ安価に流通しており、一般住宅のほとんどに用いられているのです。

問題はここからです。こういった建築材料は取り壊されたあとはどこへ行ってどう処理されているのでしょうか。

この建材は、不燃材なので燃やすことはできません。さらに、耐久性に優れ腐らない材料なのです。『ゴミも分別すれば資源』というキャッチフレーズがあります。分別して資源となりうるものは再利用するということですが、再利用されません。結局、建築廃材は廃棄物として捨てられるのです。燃えないどころか何十年経っても腐らないものが、人里離れた山の中に大きな穴をほって特殊なシートを何層にも重ねて大きな容器の中に廃棄されるのです。

#### 現代人は馬鹿か

さて、この廃棄されたゴミの山は数百年いや数千年・数万年後はどうなるのでしょうか。何層にも重ねたシートはどうなるのでしょうか。ビニールなどを燃やしただけでダイオキシンという猛毒が発生することを考えると、このゴミの山が地に還る際の悪影響は計り知れません。

明らかながあります。数千年か数万年後にこのゴミの山が発掘されて、未来の人から、『当時の人間は馬鹿だったのだろう。当時はその時のことしか考えられず、将来や未来のことは考えられなかったのだろう。』といわれることは間違いないでしょう。

#### まちをつくった規制

戦後の日本社会は、資本主義と自由主義の中で、科学技術の発達とともに大きく変わりました。家や建物は建築基準法によって高さや容積など大きさが制限され、建築材料は火災時の延焼を防ぐためある一定の耐火性能の確保が義務づけられ、家や建物が建てられてきました。つまり、建築に関する制限には日本やその地域の伝統風土や風景景観

さらに将来に及ぼす影響についてはまったく加味されてこなかったことを強調しなければなりません。

いや、都市計画法のもと住宅地や商業地・工業地などをきちんと線引きして健全なまちづくりを促した。という人もいるでしょうが、その結果はどうでしょうか。能力があり個性がある建築家や建築士が、素敵で斬新でかっこいい建物を時代の流れとともに次々に創出し続けています。が、しかしです。できてすぐは斬新でかっこいいと思うのですが、10年も経つとあつという間にどうってことがなくなり、20年も経つと時代遅れとなってしまうのです。そういったことを、戦後60年間、建築基準法や都市計画法などのもとで、家や建物づくりが繰り返されてきたのです。その結果、統一性がない家並み・街並みがつくられ、風景がつくられ、つくり続けられているのです。

#### これまでのまちづくり

これまでに、『地域の発展』『地域の活性化』などというキャッチフレーズもあちこちで何度も耳にしてきました。その結果はどうでしょうか。まずは、地元で有名な観光地や温泉街を思い浮かべてみてください。日光那須塩原鬼怒川など観光地として歴史を築いてきた国内でも有数の景勝地において、『魅力ある街づくり』が進んだでしょうか。特に温泉街を思い浮かべてみてください。答えは、言うまでもありません。魅力ある成熟した観光地になったとは到底いえないのです。つまり、『地域の活性化』『魅力ある街づくり』などというキャッチフレーズに象徴される事業やイベントは、一時的か短期的なものだったのです。長期的で広域的な視野と継続性が欠けることから、真の街づくりとならなかったのです。本来“街づくり”とは、歴史や伝統を築くもので、この認識が必要なのですが、イベント的に捉えた街づくりが行われてきたのです。こういったことに、貴重で膨大な税金が投入されてきたことは間違いありません。

#### さて、これからどうしましょうか

戦後からこれまでに高度成長と共に『社会資本』の整備は進みました。そして、今後これからは、十分すぎるほどできた社会資本を維持する時代となったのです。そして、これと入れ替わるように医療や介護や年金など『社会保障』の時代へと大きく転換したのです。人口減少がはじまり超高齢化社会をむかえたのです。しかも悪いことに、高度成長期に貯金をせず借金を抱えてしまったため、今後こういった街づくりにお金を使える時代ではなくなってしまったのです。これからは借金を返しながら、これまでにつくった道路や公共施設などを維持しながら、少しずつは街づくりもすすめるしなければなりません。

#### お金がいないまちづくり

『魅力あるまちづくり』というキャッチフレーズをよく耳にしてきましたが、日本

全国どこへいっても同じ風景、同じ街並みで巨大看板の乱立など、一部の観光地や景観重点地区を除いて風景の良い魅力ある街はほとんどありません。いや、戦後60年の間になくなってしまったのです。風景がよいところは建物がなにか少ない山地山間部か、昔ながらの家が残る過疎地などですが、そこに目を付けた観光化や開発が無秩序に進むと結局は風景を損ねるなど魅力のないところとなってしまうのです。同じ過ちを何度も繰り返さないためにも、建物や看板に関する規制を新たに設ける必要があるのです。

### 新たな規制で街づくり

そこで提案があるのです。お金がなくても魅力ある街や地域をつくることのできるのです。それは、地域ごとに建物の色や形状や材料などに規制を設けることです。これと同時に看板についても、設置箇所、寸法、形状、色、タイプ、材料などに規制をもうけることです。さらに外壁材料については、地元産の自然素材（たとえば、ローム土、鹿沼土、大谷石など）を用いて環境や未来の地球に優しい建材を開発し、建築に用いる材料の規制を設けることを提案します。

### 竹富島の秘密

良い例を挙げます。沖縄の石垣島の隣に竹富島という周囲約9kmの小さな島があります。この島には、ホテルや旅館はありません。他のリゾート施設も一切ありませんが、年中多くの観光客が訪れるのです。この島の民家は、寄棟づくりの平屋建てで、屋根は沖縄特有の赤い瓦葺きとなっており、建物のほとんどが大きさや形そして色が統一されているのです。そして道路のほとんどは舗装されておらず、白いサンゴの砂が敷いてあるだけの道路なのです。白いサンゴの砂の道と赤い屋根瓦の民家はサンゴの石垣で隔てられ、深い緑色の南国特有の照葉樹林に覆われるこの島の風景は、言葉では言い表せません。これこそが洗練された風景で、魅力あるまちであるといえるのです。この島の魅力は、この風景だけではありません。サンゴの海や、水平線のかなたの西表島のわきに沈む夕日、満天の星空など、自然の恵みを満喫できる島なのです。

### 観光開発しないことが“観光客を呼ぶ”

竹富島のこの魅力には秘密があるのです。その秘密は、ホテルなどの観光施設の建設など観光開発が一切行われなかったことなのです。普通、このように観光資源に恵まれたところは観光開発が行われるのが一般的ですが、この島では観光開発は行われませんでした。

では、なぜこのような観光開発が行われなかったかという、この島には島の憲章というものがあり、その中に『島外の人に土地は譲らない。』というきまりがあったからなのです。この一行にも満たないきまりが、魅力あふれる島にしたのです。観光開発や資本投入がされなかったことが、古来からの家や建物・道路などが残され、伝統的家

屋が守られ、洗練された家並みや風景が守られてきたのです。そして、そこに多くの観光客が訪れるようになったのです。つまり、多くの観光客を呼ぶ秘訣は、観光開発でなく規制を設けることなのです。

また、竹富島の道は、白いサンゴの砂が敷いてあるだけであることは先に書きました。つまりこの島の道路のほとんどは、道路拡幅どころか道路舗装工事さえ行っていないのです。そういった地域は日本の中でほかにあるでしょうか。『まちづくり』とは何かを根本的に考えさせられるところですので、ぜひ訪れてみてください。

#### だから提案します

家や建物・街並み・風景のことと、日本の稀有な自然環境のことなどを書いてきました。

豊かな 水 は、森と緑を育み自然を豊かにし、素晴らしい四季折々の風景を授けてくれるのです。鼻息の荒い『活性化』や『魅力あふれる街づくり』は必要ではないのです。健全なまちづくりは、チョットしたことのできるのです。

#### 建物の外装に新たな規制を

それは、すべての建築物に対して色や形や材料などに規制を設け、その規制を永遠に継続させることなのです。例えば、地域ごとにその建物の色や形や材料などに規制を設けること、地域ごとに看板などにも色や形大きさなどの規制を設けることです。これだけで 50 年後くらいには町並みや風景が変わるのです。洗練された魅力ある風景は、観光客を呼び、定住する人口が増え、産業や経済も豊かになるのです。まさに風景がよくなればその相乗効果でさまざまな産業までもが成長し、社会全体が健全に成長し維持されるのです。

#### 先送り主義にピリオドを

さらに付け加えるべきことがあります。この際、やらなければならないことがあるのです。主として、耐久性や耐火性が求められる外壁材についてです。建物の外壁材等は、その土地から産出する自然素材に限定することです。防火性耐久性および経済性に優れたものは、一見画期的な素晴らしいものと思えるのですが、もうひとつ重大なことが欠けているのです。防火性と耐久性に優れるということは廃棄処理に困るのです。困ったあげくに現状はどうなっているかという点、『山に穴を掘って埋めちゃえ』、ということになっているのです。この現状は、今さえ良ければよく、未来のことを考えない短慮で利己的なものであるということなのです。つまり、使用する建材は、自然素材で地球環境に優しいものに限定することが必要なのです。少々高くなってもそれは仕方ないことなのです。

国と地方の借金が 800 兆円にもなるといいます。これとまったく同じで、後世が何とかするだろうという先送り主義が、この住宅建材の規制に隠されていたのです。もっと

例えば、防火性耐久性に優れたものは廃棄処理に困るという課題を知っていながら、それを考慮した建築基準法にしなかったことは、まさに今さえよければよいという先送り主義のなにものでもありません。重大な間違いだったのです。

“ 奇跡のとちぎ ” を忘れずに

とちぎ県は、日本の中でもまれにみる自然にめぐまれた地域であることは何度も述べました。そして、戦後、建築基準法のもとでどのように街づくりが行われてきたか、特に観光地は、どのように成長し衰退したかを真摯に振り返ることができれば、とちぎの明るい未来が見えてくるのです。

魅力あるとちぎをつくるための第一歩は、栃木県民すべてが、日本は世界でもまれに見る自然環境に恵まれた 軌跡の島 であること、そしてその中でもさらに恵まれた とちぎ であることを知り、そして忘れないことなのです。これにより、ゆっくりと長い時間をかけて健全な地域ができていくことになるのです。これによって、真に豊かで成熟したまちや社会が形成できることになるのです。

栃木県では、冬季の多量の降雪は北西部の山間部のみにストックされ、雪解けと共に川になり地下水になって、この豊かな水を広大な平地と私達に、毎年あたりまえのように供給してくれるのです。日照に恵まれ、豊かな水を蓄える山々と、肥沃で広大な平地が隣り合っているのです。さらにです。首都圏に隣接し、日本の総人口の 4 分の 1、3 千万人以上の人口を抱える首都圏の中心部から 1、2 時間程度で行き来できることができるという地域なのです。やり方しだいで勝ち組、いやひとり勝ちとなりうる可能性を持った地域であるともいえるのです。このような地域は、とちぎのほかにもどれだけあるでしょうか。とちぎは、奇跡の 日本列島 中でもさらに恵まれた地域なのです。このことを理解し認識し続けることが、魅力あるとちぎをつくるための第一歩になるのです。

結果がでるには少なくとも 30 年から 50 年以上かかるでしょう。しかし、新たな規制を作るには、時間もお金もかかりません。未来のとちぎ人と地球人のために、建築物に関する新たな規制を、いち早く設ける必要があると思ってやみません。

薄井 徹

栃木県さくら市氏家 1773-15

TEL:028-682-6495